

製本のススメ

Vol. 134

この夏 東京は水不足と報道されていました、利根川水系のダムから水の供給を受けているのは三鷹市のみ（水量の一部）だそうで、多摩地区の水源は奥多摩や狭山から。徳川家康公が江戸の水を確保するために、玉川上水の工事をしたそうです。三多摩は水の都ですね。

今回は**限界と無意味**の話し

日々加工をしていると、何故こんな事？という加工に出会うことがあります。例えば天のり加工の伝票で、天に切り取りミシンをいれる。何か後の作業で切り取る必要があるなら良いのですが、通常はミシンで切り取るより、糊部分から剥がしたほうが早いですね。**加工側からみるとミシンの意味がない**だけでなく、加工代も増えます。コストダウンとすることを考えるなら、加工方法を見直す必要がありますが「前回と同じ」なら客先からクレームが無いという発想ならば残念ですね。

さてコストダウンと言えば、無線綴じより中綴じです。しかし、中綴じでもページ数の多いものは加工に適しません。ではどの程度までが中綴じ加工の限界でしょうか？

まず針金が確実に綴じられる厚みです。諸条件によっても変わりますが一般的には束厚（中綴じの場合は本を広げた状態で測定）が**8ミリ~10ミリ程度**と考えてください。針金を太くすれば13ミリ程度までは綴じられる場合もありますが、見栄えが悪く、また紙を通しにくくなるため太さにも限界があります。紙厚を考慮し**100ページを超えるようならば、中綴じ加工は避けたほうが良いかもしれません。**さらに中綴じ加工では**厚みが増すほど中心部のページがせり出てきます。**それにより表紙の体裁は良くても、中心部の左右寸法が詰まり、開いた時に小口とノド側の余白が少なく**体裁の悪い本が出来上がります。**本の厚みにも限界がありますね。



Tea break

菓子缶や荷造りの必需品で、手に取ると何故かつぶさずにはいられない空気の入った緩衝剤。通称プチプチですが、これは名古屋の川上産業という会社の登録商標だそうで国内シェア50%以上だそうです。その他にもエアマット・エアシートなどメーカーによって様々な呼び名がありますが、すべて商票で業界での名前は「気泡シート」だそうです。

弊社 HP は www.isekiseihon.com

facebook は 「井関製本の日々」

by (株) 井関製本